
哀しき死角

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀しき死角

【Nコード】

N2890J

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

10年ぶりに石川卓也が日本へ戻ってきた。母の納骨に。秋桜は知っているの続編ですが、これだけでも一つの話です。

プロローグ（前書き）

秋桜は知っているの続編です。

プロローグ

プロローグ

久しぶりの日本は寒く、コートの襟を立てて空港を出る。今さら帰ってくる気もなかったが、母が亡くなり家を処分することもしなくてはならず、仕方なしの帰国だった。

母は寂しい女性だった。夫に先立たれ、養子にした息子がこんな風に日本を去ってしまうのだから、何とも言えない気分だったに違いない。だが、一言の愚痴も聞いたことがなかった。日本を離れグアムに行くとした時から、好きにしていいたいのと優しくつぶやき、後は何も言わなかった。時たま日本から送られてくるちぎり絵の色彩紙は四季折々の日本を伝えていた。だが、どんなに美しい風景も心を揺らすことはなかった。飾ることもせず、段ボールにたまっていた。ただ一枚飾られているのはコスモスの絵だった。あれから10年。母はあっけなく風邪をこじらせ亡くなった。まだ、70歳だった。

師走になったばかりの墓地は寒く一人きりだった。母の納骨をすませ、永代供養の願いをして、寺を後にするともう夕方だった。すぐにも東京へ戻りたかったが、体を温めるために飲みに行くことにした。ひろめ市場は今日もにぎやかだった。ビールと熱い天ぷら、おでんなどをとると、一人静かに飲みだした。入口近くで酔った男が騒いでいる。知らん顔して飲んでいると、その男が『れいか』と叫ぶのを聞いて、思わず顔を上げた。その酔った初老の男は華村孝雄。今は亡き愛した女の父親だった。

「華村さん、ここは寒いから送りましょう」

「えっ、あんたは石川さんじゃないか？」

「はい、お久しぶりです」

「ああ、ああ、あんたは生きておったんか。今までどこにいたんや」
「はい、グアムの方で暮らしてます。今回は母が亡くなって」

「ああ、なんとまあ、みんな死んでしまう」

華村頭をがつくり下げ、泣いていた。麗華の葬儀以来会ったことはないから１０年ぶりだ。

「奥様はお元気ですか？」

「それが、この前亡くなってしまった。病氣知らずの女だったのに、乳がんになってしまった」

「そうですか。寂しくなりましたね」

華村は家に寄って行ってくれとしきりに誘うので、石川は送って行くことにした。玄関には麗華が描いた絵がかけられていた。自分が写した桂浜を元に彼女が仕上げたものだった。雄大な波が彼女のいきいきとしたタッチで見事に再現されていた。

思わず見つめていると、華村は石川の肩を優しく叩いた。

「いい絵だなあ」

「ああ、あの子は才能があったのかもしれん。褒めてやることもしなかったが…」

麗華の遺影のある仏壇は見なくなかった。だが、その写真の麗華は優しく微笑み、若さが満ち満ちていた。まだ、学生だった。

石川はその写真に背を向けて座った。華村はウィスキーとグラスを持ってきて、あぶったスルメを肴に一杯やろうと言った。石川は今日だけは飲んで一緒に過ごそうと思った。華村は明らかに年取っていた。母と同じくらいだったのに、娘、妻を失って一気に老け込んだのだらう。二階の部屋から持ってきた麗華の遺作を華村は抱いていた。越知で咲いていたコスモス。美しい絵だ。持っていていいと言われたが、あの日ここで飾ってくれと残した絵。未だに見ると心臓が締め付けられる気がする。まだ１０年しか経っていないのだ。もう１０年と思っていたが、あの哀しみに終わりはない。

翌日、華村の家を去るときに、握り合った手はごつごつした農夫

の手だった。しかし、とてつもなく暖かく優しかった。

「お互いに寂しくなったが、しっかり生きてくれよ。麗華の分も頼むよ」

「はい、華村さんもお元気で」

返事はしたものの、石川には未来などなかった。背中に華村の視線が痛かった。どう言っても華村は見透かしているようだった。石川卓也の目に希望の光がなかったことを。

第1章

第1章

石川は新宿歌舞伎町のホテルにいた。すぐにグアムに帰るつもりだったが、昨日飲んだバーのホステスが酔って店の階段から落ちてしまつて病院へ連れて行くことになったのだ。お人よしだと思ひながらも、彼女が少し東北訛りなので見過ごすわけにもいかなかった。こうやって怪我すると、病院代は個人持ちだというし。一緒に飲んだ責任も感じていた。

もう昼だ。病院に行つて病院の費用ぐらい出してやるつもりだった。しかし、その病室には先客がいた。

「しょうがねえなあ。こんなことじゃ、引越しの手続きができないつて言われても。次の客が来るんだよ、もう3時に。出て行つてくれないと」

「すみません。でも、松葉杖では荷物が持てないし」

聞こえてくる事情は石川を動かした。

「こんにちわ。私が引越しを手伝いましょう。指図してください」

「あの、どなた？」

この女はとんでもなく酔っていたのだ、飲んだ客を忘れてる。

「昨日一緒に飲んで、ここへ運んだ石川です」

「わー、すみません。お世話をかけて、その上引つ越したなんて」

しかし、先客の男は喜んでいた。

「頼みますよ。もう来ちゃうんだから」

「でも、私、お金も引つ越し先もまだ……」

「じゃ、お兄さん、次の客が来る前に部屋を見つけてください。金は払うから。今のところと同じくらいのところ。取りあえず3カ月その間に気に入らなかつたら探しなさい。いいですか」

「はい、でもそんなご迷惑を」

一気に片付くどころか新しい契約までしてくれるというので、大喜びの不動産屋は早速手配してくれた。これで、この女には借りがないという気持ちだった。彼女を連れて部屋に行き、少ない荷物をまとめると、次の部屋に運んだ。少し高いが、不動産屋はここしかないということだった。嘘だろうが今は仕方ない。契約書を交わした時に、彼女は山口未知と書いていた。

「山口さんというのですか。私は石川です」

「本当にどこまでもご迷惑をかけてしまつて。この借りたお金を3カ月の間に何とかお返しします」

「いや、僕は日本を離れるので。あなたを怪我させた責任は私にもありますから」

「そんなこと困ります。どこへ送ればいいですか」

「じゃ、この口座に振り込んで下さい。半分だけ。そうしないと私の気持ちも収まりません」

未知は深々と頭を下げ、何度も礼を言った。

「こんな体では勤められないでしょう。どうするつもりですか。ご家族は？」

「一人です。田舎には父がいますが、もう何年も帰ってません。本当にすみませんが、松葉杖でも働けます。そんなにひどい怪我ではないですから」

「では、1週間は休んでください。ここに当座の費用はあるので」「きつと返しますから」

未知は34歳だという。田舎から都会に出てきたのは結婚のためだったが、夫は5年前に亡くなったそうだった。いろいろと事情がありそうだが、聞く必要もなかった。石川は1週間ぐらいいはこのホテルにいるからと伝えて帰って来た。

ホテルは小さなビジネスタイプだが、近くには飲み屋も食事するところもあつて困らなかつた。グアムでは日本人相手に気が向いたら旅行ガイドをしたり、小さな骨董品屋をしていた。儲かるというほどはないが、昔から骨董品を見る目があり生活には困らなかつた。

外国の観光客には日本の物を売れたし、アメリカの物は日本の観光客が買ってくれるのだ。

明日は神田で古書でも買ってくるつもりだ。そんなことを考えていると、ケータイが鳴った。

「もしもし、山口です。助けて」

「えっ、どうしたんですか」

ケータイからはもう何も聞こえなかった。取りあえず未知の部屋に急いだ。

エレベーターを降りると、4階403号室が彼女の部屋だ。呼び鈴を押しても返事はなく、入り口のドアにカギがかかっていなかった。恐る恐る部屋に入ると、未知が倒れている。顔には青いあざができている。

「山口さん、大丈夫ですか」

「あ、石川さん。知らない男が2人入ってきて、部屋中を探してたんです。暴力団風で怖くて。見たこともない人です。私は訳が分かんなくて」

「どんなものを探しているんですか？」

「なんか小さい包みとしか言わないんですけど」

「小さい包みって？」

「一昨日の客から預かってるだろうって」

「でも、私のお客さんはプロダクションの部長さんで、何も預かってないんです。そう言っても聞いてくれなくて」

「他の客とは？」

「その人だけです。もう4年の馴染客ですが危ないことをするような人ではありません」

そうは言ってもこの世間ではいろんな人がいるからなと、石川は思っていた。小さい包みといえば、薬かパソコンのカードなんてものか。

第2章

第2章

山口未知の部屋を知っているのは、まだ石川とあの不動産屋くらいしかいないはずだ。石川はすぐに不動産屋に向かった。契約書に書かれてある住所は、ここから車で10分ほどだった。今日の話なんだからお前しかいないと怒鳴るつもりで不動産屋に入ると、あの男は拳銃で頭を撃たれていた。奥の社長室でも死んでいた。社長と思われる男は、金庫の前で金を数えていたのか、金が札束で落ちていた。だが、金は興味ないのか残されている。強盗とは違うようだ。こんな凶暴なやり方は見せしめとしか考えられない。一体探し物というのは何なのか。拳銃が出るといのは暴力団しかないだろう。

石川は倒れている男のケータイから警察に電話した。自分が巻き込まれるのは避けたかったが、あの女はどうするのかと、心の中で他の自分が問うている。ということは、未知の部屋の新しい住人はどうだろうかと、元のマンションに行くとそこはもつと悲惨だった。未知と間違われたのか、新しい住人もホステスということだったが、風呂場で頭から湯船に突っ込まれていた。首を押さえられての溺死と思われた。部屋には土足で数人の靴跡もある。石川は部屋を用心して出ると、あわてて未知に電話した。

「そこは危ないから、すぐ僕のビジネスの部屋に移動して」

「でも、もう来ないかもしれない」

「いや、そんなことはない。不動産屋もあなたの住んでたマンションでも殺されている」

「えっ…そんな…」

未知の震えがケータイから伝わってくるようだった。とにかく一刻も早く未知を安全なところに連れて行かないと。石川は困ったものだと思いつつも、この事件に吸い寄せられていた。

ビジネスホテルでは、未知の顔の手当てをした。骨に異常はなさそうだが、痛々しく青あざができ、目が腫れていた。買ってきた薬を塗ると、未知は自嘲気味につばやいた。

「いつもこんな人生よ。うまくいつてるかと思うとズドンって落とされるの」

石川は黙ってコーヒーを入れた。紙コップに入れても持たせると未知はさらに続けた。

「結婚したのは22の時、渋谷のブティックで働いてたら、その店長と仲良くなって結婚を切りだした途端に、僕は結婚してるって白状して。それからはその店におれずに夜の商売に。バーテンしてた男と今度は結婚できたのに、年下で車に夢中の男だったから、夜の高速ぶつとばして自分から事故って死んでしまったわ。もう馬鹿みたい。子供もできてたのに」

「そのお子さんは？」

「もういない…石川さん、タバコ持ってる？」

「いや、もうやめた」

「ふーん、偉いね」

未知はそれ以上は話もせず、石川にも聞かなかった。ただ、じつと窓の外を見るとはなしに見ていた。いろいろな過去が人にはある。「そのお客って連絡先知ってる？」

「名刺をもらったわ。待ってて。その財布に入れてると思う。この前も同伴で出勤したし」

渡された名刺は聞いたことのないプロダクションで、モデルを雑誌に紹介したりといっても大手ではなく、デパートのチラシや通販のカatalogに載るモデルだという。最近もそんなに羽振りがいいという話は聞いていないそうだ。未知は東北訛りがあり、この男、信田宗佑は宮城出身だと話していたから懐かしかったのだろう。店には月に2、3度で多くはないが未知にとっては数少ない馴染客だった。

その男がなんで追いかけてるのか、取りあえず未知はプロダクションに電話を試みた。

「もしもし、そちらに信田さんはいらっしゃいますか」

「あんたは誰？」

その口調に未知はあわてて切った。

「もう信田さんはいないんだわ。だって、あの声さっきの二人組だわ」

「こうなると、八方ふさがりだな。見せてはいなかったかい、その包みとやらを」

「ええ、だってあの日はお嬢さんのピアノの発表会に行つて来たつてご機嫌で話してたわ」

「その信田の家つて知ってるかい？」

「いいえ、そんなことは聞かないから」

「娘の年齢は？ 発表会の場所へ行けば何かが分かるかもしれないな」

「えーと、神田プリンスホールつて言ったと思う。歳がいつてからの子はかわいいつてまだ小学生のはずよ」

そこまで聞くと石川は未知にこのホテルから出ないようにいうと、ホールへ向かった。

警察は殺人事件が相次いで起きててんでこ舞いだつた。一人目は佐々不動産の社長佐々大輔、もう一人は営業の山崎貞夫。紹介されて入居した松田理恵。このつながりは一体何なのか。

捜査一課の野口速雄は相棒の浜田博と二人で、その不動産のトラブルについて調べていた。この残忍な殺し方は暴力団か、それとも外国のマフィアか。だが、金に手つかずというのは意味が分からない。

松田の部屋は入居したばかりだというから、前の住人は山口未知に話を聞くしかないが、そこはもぬけの殻。ただ、荒らされた形跡があるという。この女は一度電話をかけてきた。助けてと。だがどこかに消えてしまった。足を骨折してるという近所の話もあるから、

野口はその病院を探すことにした。

第3章

第3章

石川はホールに着くと、事務室へ急いだ。ここに警察が来たらやっかいだからだ。

あくまでも落ち着いて対応しないと怪しまれる。事務室は2階の突きあたりだった。ひとつ大きく息を吸って、ドアを開けた。

「失礼します。先日ここでピアノ演奏した信田の家なのですが、忘れ物をしたというのでちょっと見に来たのですが」

「ああ、川田先生の教室ですね。信田さん…美香さんですね」

「はい。そうです」

「何を忘れたのですか」

「いや、楽譜を入れた袋を置いてないかと」

「楽譜？ きらきらばし変奏曲か…」

「なんだ、その曲なら暗譜だな、しまった」

石川は娘が幼いということを改めて知ることになった。探してくれていた事務員が申し訳なさそうに来た。

「ありませんけど」

「いえ、どうせ車の中にも忘れたんでしょう。どうもすみません」

「いいえ、信田さん大丈夫でした？」

「えっ？」

「奥様が倒れたって、あの日もすぐに帰られたから」

「ああ、はい、どうもお世話をかけました」

そんな日に飲みに行くなんて、信田って男はどんな奴なんだと苦々しく石川は思った。

だが、もし信田の妻の名を語ったとしたらどういうことだろうか、石川は事件の全容がつかめなくてもどかしかった。

その頃野口刑事は山口未知について病院で聞いていた。

「階段から転げ落ちたって、夜間診療で来ました。我慢強い人でしたが、家族はと聞いても身内は東京にいないということでした。でも、連れてきた人がいました。一緒に飲んでたと言ってたから、お客さんではないですか。代金もその方が支払ってましたよ」

「そうですね、お名前はなんて言っていましたか」

「いや、家族じゃないというぐらいで。中肉中背で30代後半くらいですから、印象に残ってません」

「そうですね。何か特徴はありますか、ほくろとか眼鏡とか…」

「いやあ、何も覚えてません。眼鏡もなかったし服装も普通のコートだったと」

「また、何かあったらお知らせください」

「わかりました」

野口は頭をかしげながら病院を後にした。今頃ホステスに払ってやるような奴は金持ちか、それとも身内がないのかと。

未知は震えていた。このホテルに一人でいるととても不安になる。あの男たちが信田に何かしたのだろうか。不動産屋と違って信田は優しい客でどちらかといえば、未知の味方になってくれるような人だった。彼は仙台出身だというので、話もすらすらできた。今までは東北弁を悟られないように随分苦労した。でも、信田はそのイントネーションを懐かしがってくれた。

「いやあ、みっちゃんも東北なんだね。僕も仙台だよ」

だから、同伴で出勤する時は本当にデート気分だった。あの日も信田は電話すると快く応じてくれた。

「いいよ。久しぶりだし。今日は娘のピアノ発表会で会社はもう早退してきたから」

信田は部長といっても父親が社長だから、ノンビリしたものだ。父は社長の座を渡さないと踏ん張っていたが最近は部長を名指ししてくる仕事が増えてきた。信田はその父を怒らさない程度に働いていたのだ。結婚も46になってからしたから、娘はまだ7歳だった。この娘を溺愛した信田は、運動会、学芸会など、全て会社は休んだ

という。今日はピアノ発表会は娘のビデオは妻にまかして、自分は真ん前で今日も娘を見つめ続けた。終わってからはピアノ教室でパーティーというので、自分も飲みに行こうかと思っていたところだそうだった。

未知は優しくあつたかい女だった。意気揚々と待ち合わせの場所に行くつもりだった。すると、一人の男がぶつかって来て、近くの植え込みに倒れこんでしまった。その時は男を捕まえてくれと大声を出そうにも、背中を強打して声も出なかった。男を追って数人の男たちが追って行った。だが、誰も信田を助けてくれなかった。やっと立ち上がったがその時にポケットに包みがあることなど気付かなかった。

未知とは仲良く飲んで1時間ほどで帰って来た。二日後に仕事場で男たちに囲まれても訳が分からなかった。どうも、ぶつかった男が何かを渡したらしいが、この日のコートはべつのコートを着てきたのである。コートは家にあるはずだ。しかし、それを話したら娘や妻が危ない。咄嗟に出たのは未知に渡したという言葉だった。こんなことを言ったら未知に危害が及ぶことは想像できたが家族の生命にかかわる問題なのだと自分に言い聞かせていた。

数人の男に殴られ、社長の父はすでに気を失っている。

「年寄りなんだ、止めてくれ。話すから。飲み屋の女に渡したんだ」

「何だと、どこの飲み屋だ」

「歌舞伎町のバーだ」

男たちは本当だなと何度も聞きなおし、信田を組の息のかかった旅館に連れて行った。男たちの様子がとにかく急いでいることは明白だった。その包みは何なのだろうかと考えていると、この男の家にも走って行けという声も聞いたのだった。娘が、妻が危ない。

美香は父の匂いが好きだった。コートをクリーニングに出す時は、美香が遊んでも母は怒らなかった。ポケットの中をのぞくと封筒があり、中はたくさんのお金が入っていた。1年生の美香にはそれはいろいろな模様に見えてどれも読めなかった。

「わあ、すごい。ちょっと遊ぼうかな」

袋を秘密のキャンディー缶に入れてから、クリーニング店にコートを持って行った。こうすると20円お小遣いをもらえるのだった。美香が小さな自転車のかごにコートをのせて出ると同時に、男たちが家にやって来た。いきなり玄関で顔を殴られた妻の信田舞子は廊下に崩れ落ちた。

「何ですか、あなたたち」

「旦那の部屋はどこだ」

土足で上がりこみ、あらゆる引出しを全て見た。舞子は震えて祈っていた。娘が帰ってこないことを。しかし、この男たちが捜しているものが見つからないと激しく怒りだした。

「おい、包みをどこへ隠した」

「何のことですか」

「旦那が一昨日帰って来た時に包みがあったはずだ！」

「何を言ってるのか私には分かりません」

そう答えると男たちはここじゃないんだとつぶやいて、どこかへ去って行った。警察へ電話しようにも家の電話線は切られ、ケータイは折られていた。

第4章

第4章

石川は信田の家に向かっていた。川田というピアノ教室の先生に住所を聞いたのだ。その家は渋谷にあった。静かな住宅地は道幅も広く、少し高台になっており、落ち着いた家並みが続いていた。信田の家も50坪くらいはあるだろうか。警備の会社のシールも玄関に貼られてあり、バラが生垣になっており、ステンドグラスがおしゃれな出窓に飾られていた。

信田宗佑の名前の下には舞子、美香と書かれていた。呼び鈴を押しても誰も出ない。しばらくすると玄関の扉が開く音がした。小さな女の子が出てきた。信田美香だろうか。

「美香ちゃん？ お父さんいる？」

「いないです。おじさんはどなたですか」

「石川といいます。お母さんは？」

ここまで聞くと、少女の目に涙があふれてきた。

「どうしたの？」

聞くと、少女は声をあげて泣き出した。そのただならぬ雰囲気を感じ、家に入るとリビングに信田舞子と思しき女性が、顔を殴られて倒れていた。帰って来た時にはこうなっていたという少女は警察に電話をしたいのに、電話を切られてるといい、母親のケータイもすでに壊されていた。

舞子は打ちどころが悪かったのか、気を失っているのか動かない。石川は自分のケータイから救急車と警察を呼んだ。少女は父親の帰りを待っているようだった。きっと父も帰ってこないだろうと思っただがそうは言えなかった。少女は石河とは初対面なのになぜか近づき手を握って離さない。怖かったのだろう。しかし、子供連れでどうしたらいいのか。ここにいたらまた厄介なことになる。

「おじさんは帰るけど、もう警察や救急車が来るから大丈夫だよ」

「いや、おじちゃんという」

「ママは病院に行かないと」

「だって、ママはさようならって」

「えっ」

あわてて脈を測るがない。娘はひくひく泣くし、仕方がないので石川は娘を連れて出てきた。これは誘拐になってしまふ。どうしたらいいんだ。手を握る手は決して離さないというほど少女の力がこもっている。

家を出て細い路地を通って通りまで出ると、サイレンが激しく鳴ってきた。きつと今頃はたくさんさんの捜査員が来てることだろう。少女は震えながらしがみついてくるので、タクシーに乗ると、取りあえずホテルへ向かった。

部屋には未知が青いあざの顔で出迎えるから、少女はますます手を握って怯えている。

「大丈夫だよ。この人はいい人だよ」

「こんにちわ」

挨拶をするが、石川の手は離さない。これほど子供に好かれたのは初めてだ。未知は笑いながらも子供を連れているということの意味を知った。きつと、信田家もみんな…。

「美香ちゃん、お父さんは帰って来た？」

「うっん」

「何かお父さんは家に持って帰らなかったかい？」

「おみやげ？」

「うっん、違う。なんか包みらしいが」

「知らないよ。ママにも渡してないよ。パパはいつもおみやげは一番に私に渡してくれるし、お仕事の物はママに渡すよ」

「そうか。ところでお腹すいてないか？」

「うんすいてる」

ホテルの1階に喫茶室から部屋に持ってきてもらった。ビジネス

で喫茶があるのはありがたい。ホットケーキを美味しそうに食べる
と、やっと笑顔が出てきた。だが、石川が立つとすぐに手を握りに
来る。

「あら、そんなに愛されて困ったわね」

未知は笑いながら言うが、慣れない石川はトイレに行くにもいち
いち断っている自分に呆れていた。

やがて、疲れた美香は寝てしまった。テレビをつけると信田家の
ニュースを伝えている。このホテルにもやがて急に子供連れになっ
たから、この子は未知の子供ということにした。だが、未知は自分
より石川に懐いているなんて怪しまれるわねと笑っている。確かに
そうだ。

静かに寝息を立てているが、ふと、目を覚ますと泣きじゃくりだ
した。

「ママ、ママ、パパ」

石川は隣に行き布団をとんとんと優しく叩きながら大丈夫だから
と囁いていた。未知はこの光景はどう見ても父と子に見えるってつ
ぶやいた。

信田宗佑は家にも包みはないということに痛めつけられていた。

あの日自分は会場では母が貧血と言って事務室には早く帰るからと
嘘を言っ出てきた。そう言わないと片付けに参加しないと許され
ない雰囲気があった。だが未知と飲むために急いでいたのだ。ぶつ
かって倒されたときに背中が痛くてポケットになど手を入れる余裕
もなかった。しかし、きつとあのコートの中だと思った。家族は何
も分からないはずだ。本当に会場の片づけをしておけばよかったと
つくづく後悔をした。

テレビをつけると信田舞子が死んでいるというニュースに宗佑は
愕然とした。

「おい、なぜ、妻を殺したんだ！ 妻は何も知らないと言ったはず
だ！」

わめく宗佑の口を黙らせると、一人が顎で指図すると、椅子で信田の顔を殴った。鈍い音が鼻の骨を折ったことを表していた。

盗まれたものは組長の印鑑だった。しかも銀行印や実印であちこちの貸しビルの登記に使われているものだ。盗んだのは組に10年もいる信頼していた小松豪だった。小松の妻が火事で顔を大やけどをした。美人と言われていた妻はひどく人相が変わってしまった。

じりじりと焼かれたため、鼻は消え、唇もひっついてメスで切開するということになった。この顔を元に戻すのは無理だと言われたが、外国では死んだ女性の顔を別の女性に復元したという例もあった。そんな整形手術にいくらかかるか億単位の金が必要なのは言うまでもない。組長に話したが、お前の女の顔に出せるかと一蹴された。

返事は分かっていたが、せめて鼻だけはつけてあげたかった。だが、冷たく部屋を出されてしまった。金庫から奪った印鑑を一つだけ盗むつもりだったが、どれがどの印鑑か全く分からず全てをポケットに入れて逃げるところを見られたのだった。

昔から俊足の小松は逃げ切るところだったが、信田にぶつかった時に彼のポケットに入れて逃げた。だが、転んだ小松には追手が追いつくのは当たり前のことだった。小松の体が東京湾に深く沈められたのはその日のことだった。もちろん、体が浮くことはなかった。

第5章

第5章

石川は少女に近い過去を持っていた。身寄りがなく心細かったあの頃を思い出すと、とても冷たく突き放すことはできなかった。だが、今まで子供を持った経験もなければ、当然結婚したこともない。グアムでも親しくなった女性はできても、いつも一緒に暮らすことなどは考えたこともなかった。

山口未知は青あざがまだ残っていたが、美香は慣れてきた様子が見えた。未知は自分のマンションは怖くて帰ることができなかった。そこで、石川は新たに部屋を借りることにした。小さなアパートだが、3人が身をひそめるにはちょうどだった。この少女の学校は落ち着くまで休ませるしかない。事件が未解決の間は命の保証ができなかった。長引けばまずいが当分は仕方ない。未知は足のリハビリも兼ねて2階建てならちょうどだと呑気なことを言っていた。

この疑似家族に女二人はどこか満足していて、石川はこの不思議な感覚を受け入れるのは難しかった。彼女たちのために働くという気にはならなかったが、事件をそのまま置いておくと美香には辛さは来ないと思っていた。宗佑はどこに行ったのか、父親だけでも探したかった。美香は口にする不安なのか、父のことは話さなかった。ただ、暇さえあれば石川の手を握りに来るのだった。

警察は信田宗佑と美香の行方を探していたが、娘目当てなのか、父親の関係なのか、混乱しているようだった。信田宗佑の父は息子も孫も消え、嫁が殺されたということで床についてしまった。社長の座を早くから渡しておけばよかったとさえ考えた。かわいい孫を失うことは何よりも辛かった。

野口刑事は未知が働いていたバーへ出かけていた。バーテンは未

知がいなくなる前からのことを教えてくれた。

「みっちゃんはお客とこの日に同伴で出勤です」

「それで、山口さんの相手は誰ですか」

「ああ、信田さんです。信田宗佑さん」

「えっ、信田宗佑？ プロダクションの部長さん？」

「そうです。みっちゃんの馴染の客です」

こんなところとつながってるんだと野口は思った。信田と山口未知がつながっているということは殺人がまだまだ続くかもしれないと感じた。あの不動産屋や松田のように。さらに怪我した日のことを聞くと、

「ええ、階段から落ちてしまつて。一緒に飲んだのは初めての客でしたが優しい人で、飲ませたのは僕だから病院に連れていくつて」

「そのお客はどんな人ですか」

「うーん、中肉中背で日本が懐かしいつて言つたような気がするなあ」

「名前は言わなかつたですか？」

「いやあ、聞かなかつたですが、ちょっと他の子に聞いてみます」

すると、奥で化粧していたマキというホステスが出てきた。

「確か、名刺を下さいつて言つたら、作つてないつておっしゃつて。どんなお仕事ですかつて聞いたたら、南の島で土産物店だつて言うから。ふざけてると思つたけど」

「ふーん、どこかなあ」

「それはわかりません」

野口はこの店での情報がありがたかつた。一体南国の土産物屋は誰なんだ。なぜ、この女を助けてるんだろ。ところが、店にいた間に警察の鑑識から電話があつた。病院で残された領収書の指紋が10年前の詐欺事件の容疑者石川卓也ということだつた。その事件を担当した段松が今年神奈川に異動しているという。早速野口は段松刑事のところに向かつた。

信田宗佑は関東昇竜会の組長、佐賀景二郎の貸しビルにいた。もう、すでに1週間が過ぎ、宗佑の娘と山口未知の行方を組をあげて探していた。だが、どう探してもいなかった。信田が何かを知っているとみて、組では殺すことはしなかったが、それでも時間の問題に思われた。連中はその日のコートがないとは気づいていないようだった。もしコートがないのならクリーニング店かとも思ったが、それなら妻がポケットから出しているはずだ。しかし、いつものようにお駄賃ほしさに美香が触っていたら、美香に危害が及んでしまう、決して言うてはならないことだった。

似たようなコートはもう1枚あったし、そこまでは頭が回っていないようだ。だが、美香がどこへ、誰に連れていかれたのか気が気ではなかった。若頭の田神が信田に向かって

「おい、信田。まだ何か隠してるだろう？　これほど探してもないなら、娘の行きそうなところはどこだ？」

「知らない。私はここにずっと捉えられてるし、それはあんたたちが一番知ってるじゃないか。私だって知りたいよ。娘はどこだ」

「生意気なことを言うんじゃないよ。爺さんの家のほかに行きそうなどこはないのかい」

「友達の家なら、警察だつて動いているから報告がいくだろう」

「そりゃそうだ。だが、日が経つとお前を生かしてる理由もないのにやりと笑つて、田神はそろそろあの印鑑が他の組に渡つたりしないのであれば、今から偽造する時間ができると考えていた。ここまですで通帳にも登記にも何にも変化はない。本当にどこかのホームレスが拾ったのかもしれないのだ。これは組長にとっては胸をなでおろすことができた。」

信田は時間に余裕がないことを悟った。一か八か、コートだけ言うてみよう。

「あの日のコートは細いグレーのストライプが入ってる。似たようなコートがもう1枚あるはずだ」

「何だと。黒のコートだけじゃないのか」

「ああ、忘れていたんだ」

という間もなく、信田は思い切り腹をけられた。だが、これでも少しは命が途切れることはないと彼は確信した。田神は3人を引き連れて夜の信田邸に向かった。警察がロープを張っている家の中へ数人が入り込んだ。玄関口で見張っていたパトロールの警官はすでに気を失って倒れていた。

クローゼットにお目当てのコートはなかった。信田の言うとおりだった。では、印鑑はどこだ。妻を殺してしまったことを初めて田神は後悔していた。組長の叱責が叱責で終わることを祈る自分が生まれていた。

第6章

第6章

「ちょっと、聞きたいことがあるんだけど」

吉本クリーニング店に人相の悪い男たちが来た。妻の圭子はこの店の客ではないことはすぐにわかった。

「なんでしょうか」

「信田さんがコートを持って来たでしょう」

「ああ黒のコートね。出来上がってますけど」

「そのコートのポケットに何か入ってなかったかい」

「いいえ、何も。ある時は小袋に入れてお渡しするんですけど」

「そのコート誰が持ってきた？」

「ちょっと待ってくださいね。主人が受けたと思うので」

奥に入ると、やがて小太りの吉本浩二が出てきた。

「信田さんのお嬢さんが持ってきましたよ」

「その子は今はどこかに消えたって言う子どものことかい」

「そうです。可哀そうにねえ」

最後は挨拶もせず男たちは店から出て行った。吉本夫婦は気味悪そうに

「いやだねえ。なんか探ってるんかね。何もなけりやいいけど」

「お前も気をつけるよ」

そこへ、また、一人の男がやって来た。まだ、暴力団がと思って夫婦は体に力が入った。野口刑事だった。

「ああ、警察の人ですか。よかった」

「はあ、何かあったんですか」

「今ね、3人の男が来てね、ちょっと変なこと言うから」

吉本圭子は男たちとのやり取りを野口に話した。野口は、事件が繋がって来たと確信した。信田の手に暴力団の何かが渡ってしまっ

ただ。しかも、小さい何かのようだ。だが、娘ということを知ったら、警察が先に見つけないと美香の命が危ないと思った。一体どこへ消えたのか。野口はこの事件で消えている信田が暴力団に捕まっているに違いないと思い、各暴力団事務所に話を聞きに行くことを捜査一課に告げた。

石川は美香の持っている缶の中味をずっとおもちゃと思っていた。
「どんな宝物が入ってるの」

「見たい？」

「ああ」

得意そうに美香はおもちゃのペンダント、試供品の小さな口紅、プーさんの携帯ストラップ、小さな袋を見せた。その袋はきれいでも何でもなかった。

「その袋は？」

「これ？ 積み木」

「積み木かあ、随分小さいね」

「うん、ハンコの積み木」

「ハンコ？」

「うん、まだパパに頂戴って言ってないけど」

「じゃ、パパに内緒なのか。なんで？」

「だって、あの日から会ってないもん」

「そのハンコ見せてくれる？」

「いいよ」

たくさんの印鑑だ。しかも認印だけでなく銀行印と思われるものはいくつかある。これは何なんだ。子供のおもちゃではない。でも、信田のものなら金庫かどこか大切な引き出しに入れてあるだろう。少なくとも子供が遊ぶようなところには置かないはずだ。石川は胸騒ぎがしてきた。

「このハンコはどこにあったの」

「パパのコートのポケット。クリーニングに持って行ってってママ

に頼まれたから、ポケットに入ってるのを出したの」

「ママは知ってるの？」

「うっん、先にクリーニングに行ったから。帰ったら、ママが…ママが…」

しまった。思い出させてしまったと石川は美香を抱き寄せた。しくしく泣いている美香は小さくてかわい天使のようだった。だが、この印鑑はきつと信田の家のものではないということが容易に理解できた。ということはみんながこの印鑑を探して、知らないものがみな殺されて言ってるのだらう。どこの組のものか、認印は佐賀という名前のものが6本ある。他に読めないような銀行印が5本。これがなくてさぞ困っていることだらう。多分貸しビルやクラブ経営、賭場などの収益を貯めているものと登記に使われる印鑑だらう。少なくとも簡単に紛失届を出せないものなのだ。無くしても警察に探してもらえないものなのだ。

石川は美香に返しながら

「美香ちゃん、このハンコを無くした人が必死で探しているよ。それにパパも」

「じゃ、警察に持っていく」

「でも、そうするとパパの命は取られてしまうよ」

「えっ、どうしよう」

石川は警察では信田の命は消える、だが、これを持っているから引き換えにという取引は無謀なように思った。多勢に無勢では勝ち目がない。どのような取引が可能か、関東昇竜会は最近マンションで隠れた賭場を開いている噂だった。先日もしくつかの賭場が摘発されたが、イタチごっこことテレビでも評論家が話していた。世の中が不景気になればなるほど、一攫千金を狙うやつはいるものだ。暴力団にしてみれば、需要と供給というに違いない。

信田はクリーニング店に行った若い者たちがなかったと耳打ちするのを見ていた。本当の場所はどこにも分からない。美香のいる場

所ですら浮かばない。この貸しビルは目隠しされて連れて来られたから、どこなのか皆目見当がつかない。トイレでさえ、紐をつけられたままだから逃げることもできない。トイレの窓からは隣のビルが見えるだけで手掛かりになるものは見えない。この小さな窓では通することも不可能だ。美香の命が狙われていようとも助けに行くこともできない自分に腹が立って仕方がなかった。

しかし、幸いなことに娘の居場所は暴力団も知らないようだし、自分の命はその袋が見つかるまでは保障されているようだ。信田はトイレの棚に目をやると、新しいペーパーが置かれていることに気付いた。人差し指を噛み、血が出ると、その血を指につけて字を書いた。『助けてくれ 信田宗佑』と書くと、誰かが拾ってくれることを祈って放り投げた。

「早くしろ」

と、紐を握ってる男がせつつく。水を流して、腹が痛いと言いながら信田はトイレを出た。

第7章

第7章

山口未知は幸せな気持ちがわいてきていた。可愛い子供と優しい夫。疑似家族であつても楽しかった。娘がいてもいい年齢だったし、何よりいつも一緒というのがうれしかった。暴力もなく穏やかな男。骨折はもう良くなつてきていたが、どこかでまだ甘えているところもあつた。

未知はギブスを外さなくてはいけなかった。これをしたままでは病院に行くしかない。このギブスを外してくれと石川は言われても戸惑うしかなかった。そんなもの外したこともないし、もし骨折箇所がうまくつながっていなかったらどうするのかと未知に言つたが聞こうとはしなかった。彼女はこのささやかな幸せが続くことを祈つていた。石川はホームセンターで電動鋸を買つてきた。美香は興味しんしんで覗きこんでくるので、危ないからハンコで遊んでてというしかない。それで欠けても誰も叱ることはない。

皮膚に触つたらそれこそ血が吹き出る。ドキドキしながらも二人は息を止めて作業を始めた。緊張して汗びっしょりになった。未知も体をこわばらせている。その未知の様子をみるだけで、石川もますます緊張してきた。やっと、ギブスが無事取れると、未知はにこにこしながら大丈夫と笑つて言つた。だが、これからリハビリをしないとまだ歩くのもヨタヨタしている。

「それでも、一回りこつちの方が細いわ」
「そりゃ、筋肉が落ちているからな」

美香は外したギブスを、自分の足にはめようとしている。何とも子供の考えそうなことだ。石川は電動鋸を片付けながら、これからのことを考えた。今のままでは信田が危ないし、美香も家族がいなのは哀れだ。警察にどの場面で伝えるか悩んでいた。ふと、頭に

浮かんだのは自分の事件に携わっていた細田と段松だった。細田はもう定年だろうが、段松はいるんじゃないかと思っていた。明らかに暴力団と分かったからには、もうこの危険な状態を一人で守るには限界がある。

「未知さん、今から知り合いの刑事さんに連絡するから」

「ちよつと待つて。今のままでいいじゃないの」

「何をばかなことを言ってるんだ」

「だって、3人で暮らせるわ。私だってもうすぐ働くし」

「駄目だよ、美香ちゃんには父親がいる。学校だって必要だ」

「それはそうだけど、私はやっとあつたかい生活ができて…」

「僕もだよ。でも、これはあくまでも作った家族で偽物だ。今は雰囲気酔ってるだけさ。でも、すぐに現実にあづかるさ。たとえば病院に行くとき、会社に勤めるとき、世の中は甘くないよ」

「そうね。でもあなたはこれからどうするの？」

「君たちが危なくないとわかったら帰るさ。今は行きがかり上放つてはおけない」

「私を連れて行って」

「どこへ？」

「あなたの行くところ」

「観光じゃないんだ。君にはあの島は似合わないよ」

「いいの、似合わなくても。一度連れて行って、ずっとそばにすることじゃないわ」

石川はその言葉を聞くと、自分が家族を求めていることを感じ取ったのかと心が疼いた。

「わかった。一緒に行こう。過ごしやすいところだよ」

「美香も行く」

「はいはい、お嬢さんもいつか連れて行くよ」

石川はそんなこと本当に来るだろうかと考えた。なぜかその未来の絵は浮かんでは来なかった。

野口は段松に会っていた。石川が不幸な事故の犠牲者ということも知ったし、彼が起こした事件は不起訴になっていた。誰も被害者とならなかったというのだ。不思議な話だったが、凶悪犯でもなければ詐欺野郎でもなかったことは安心だった。段松は事件に協力すると言ってくれた。その段松に連絡があったのは、それから数日後のことだった。石川はまだ顔は出せないと言った。理由は小さい子供を抱えているから、目立つことは一切したくないということだった。段松は

「石川さん、犯人が躍起になって探してるようだが、一体何か知ってるかい」

「それなんです、どうもやつらの大事な印鑑だと思うんです」

「印鑑？ 何の印鑑ですか」

「どうも、銀行印がいくつかと認印なのですが、契約書や登記に使ってるものじゃないかと」

「なるほど。でも、それをどうやって手に入れたんですか」

「子供がおもちやのように大切に持ってたんです。缶に入れて」

「美香ちゃんですか」

「ええ、父のコートをクリーニングに出すときに見つけたって」

「そうかあ、それでみんなが死に物狂いで探しているのか」

「でも、これを警察に渡すと信田さんが殺されてしまう。それは美香ちゃんにとって不幸だ」

「うん、確かに。だが、今のままでは君は誘拐したことになってしまっ
まう」

「もう一人、行きがかり上山口さんも一緒です」

「山口未知か」

「はい、無事です」

「この電話を使うことにしよう。君には折り返し連絡するから」

「わかりました。段松さん、よろしく願います」

「わかった。信田さんを助けるから」

ビルの谷間に転がったトイレットペーパー。一人のホームレスが
いいものがあると見つけた。何か書いている文字は、血のようだっ
た。ここ最近公園のトイレットペーパーも普通の人が持つて行つて
しまふ。この間も主婦と思える人がごっそり持つていこうとするの
で注意すると、

「あなただつて持つていつてるでしょう」

「いや、私はここに置いてるのをこでしか使わないから、盗ん
でなどいない」

「でも、公園の水も電気も使つてるじゃない。私たちは払つてるの
よ」

「それはそうだが」

「邪魔しないで。こんなこと、主人の会社がつぶれなけりや私だつ
てしないわ」

といつて逃げてしまった。空しい時代だ。ホームレスの自分が言う
のもおかしいがと平井玄はつぶやいた。

「助けてくれ 信田宗佑」

声に出して読むと、そのまま公園のテントに持ち帰った。一緒に
暮らす新さんに見せると、

「なんだ、ふざけてるんかなあ」

「でも、トイレにある紙つてこれしかないから、それを放るなんて
やっぱり捕まつてるんと違うか？」

「わしらの言うこと信じるかなあ」

「ああ、妙なことに関わり合いたくないなあ」

「でも、マスコミに言つたら金になるんじゃないか？」

「そつだなあ、電話ぐらいしてみるか」

拾つてきた週刊誌の編集部に電話を入れてみることにした。あわ
てて記者が来たのは言うまでもないことだった。

第8章

第8章

週刊群青の記者新庄猛は張り切っていた。やっと手に入れた情報だ。しかもどこも知らないスクープになる。トイレトーパーに書かれた悲痛な血文字と見出しまでできている。センサーシヨナルだ。きつと、信田宗佑はこの辺りのビルにいるのだ。ホームレスに連れてきてもらった場所は関東昇竜会の貸しビルがある場所だった。トイレの窓がぁいてるのはその4階の場所。

写真だけでも撮りたい。だが、ここでウロウロしていると怪しまれる。あくまでも通行人のようにしないといけない。編集長は暴力団絡みなら命の危険もあるから、早まった行動はくれぐれも慎むように言われた。だが、入社して4年。まだ1回もスクープは取れていない。何としても手に入れたい写真と状況。そこへ、中華料理の出前を持ってきた。早速、新庄は交渉を始めた。

4階の貸事務所からだった。岡持の中は3人分の天津飯とスープが入ってる。

「すみません、伯龍です。出前をお届けに来ました」

「おう、待ってたよ。遅いじゃないか」

「すみません。立て混んじやって。申し訳ありません」

「普段の兄ちゃんと違うじゃないか」

「ええ、ちよつと昼から用があるって交代なんです」

「そうか。はい、3千円」

「ありがとうございます」

あまり、見回すことはできないが見える範囲で2人。つまりあと1人前は信田のか。それとも見張ってるやつがいるのか。

公園で待ってる兄ちゃんに上っ張り岡持を返すと、代金と1万円を払った。

「また、よろしく」

「もうないよ。こんなこと」

そう言いながらも、新庄は早鐘のように心臓が鳴っていた。我ながらよくああ言えたもんだと誇らしかった。ケータイで中の様子を伝えると、編集長は危ないからも帰ってこいと言ったが、もう少しここで写真の1枚も撮りたかった。ビルとそのトイレの窓。しかし、新庄のその様子を見た男がいた。貸事務所の窓から

「あの野郎、やっぱり出前じゃなかったんだ」

すると、もう一人の男が近づいてきた。

「さっきの出前持ちか。すぐにひっ捕まえて来い」

階段を駆け降りると、ものすごい勢いで男が2人やって来た。新庄は脱兎のごとく逃げ出した。

「しまった」

逃げなければ完全に殺されると思った。そこへ、編集長から通報のあったパトカーが来た。あわてて、男たちは今来たビルに走って戻った。

「警察だー！」

その声を聞く前に、信田は連れ出されていた。仲間が新庄を捕まえに行くと同時に、危ないと思った見張りの蒲田は近くの駐車場で信田を車に乗せていた。

「くそー、なんでここが分かったんだ」

信田は警察があのでイレットペーパーを見つけてくれたんだとうれしかった。しかし、またこのまま連れていかれたら殺されるんじゃないか、そう思うと一緒に乗ろうとする蒲田を思い切り蹴った。

「何をしやる」

信田は手を縛られているが、必死で抵抗した。声だけでもと

「うおーっ！」

と叫び続けた。これが最後かもしれないと思うともう無我夢中だった。蒲田も逃したら生きてはおれないとつかみかかる。二人の様子はどちらも命がけですさまじい形相だった。しかし、蒲田は最後の

一手を取り出した。拳銃だった。

「早くおとなしく乗れ！」

しかし、そうですかと乗ってしまえば、今度は殺される。その拳銃に向かっても突進してくる信田に対し、蒲田も恐怖心を抱いた。思わずひるみながらも撃った一発は、信田の太ももに命中した。車から外に飛び出した信田を乗せていると、蒲田は警官が向かってくるのを見つけあわてて急発進した。

野口刑事はナンバーと車種を伝え、各所にパトカーを配備した。その頃重要参考人の関東昇竜会の佐賀は警察に呼ばれていた。

印鑑は組員が盗んだもので自分は探しているだけといい、殺人事件は若い衆が起したのかは自分は関知していないと話していた。信田がどこでどうなったのかも知らないという。勝手に血気盛んな組員がしたことだろうが、自分は家にいたという。確かに佐賀は家から一步も出ていないが、鉄砲玉はたくさんいるということだ。警察は今回は全く関係のない市民まで殺されていることが許せなかったし、このままでは済まさないぞと警察の威信をかけて捜査するつもりだと伝えた。佐賀も馬鹿ではない。ある程度は協力しないと関東昇竜会の存続にかかわることが分かっていた。

石川はテレビで関東昇竜会の幹部が捕まって、信田が撃たれたことも聞いた。だが、信田はまだ撃った男と一緒にどこにいるかわからないという。ふと、後ろを見ると、美香が目を見開いていた。

「パパなの？」

「美香ちゃん」

「パパが撃たれたの？」

「おいで。大丈夫だから」

美香を膝にのせるとテレビを消した。美香は震えながら泣いていた。ここで笑って過ごしていてもこの子にとっては石川や未知は仮の家族なのだ。この子は本当の家族の無事を祈っている。どうしても信田に助かってもらわなければならないのだ。未知も二人の様子

を見て、疑似家族がもう終りに近いことを知った。

第9章

第9章

山口未知はいつものように、美香の手を取り買い物に出かけた。

美香は荷物を持ってくれるし、話がかわいらしく未知は本当に幸せだった。美香の母がどれほど愛していたかということも嫌というほど分かった。美香の言葉はいつも母のようだった。

「そんなにお菓子を買ったら痛い歯医者さんに行かなきゃいけないよ」

「お洗濯物は3時過ぎたら入れないと。あとは湿ってきちゃうよ」
「帰ってきたら、うがいと手洗いだよ。おやつ食べれないよ」

どれも母親の口癖だったのか、美香を見ていて分かってくる。石川も穏やかな人柄で家庭に興味はないと言いつつも、黙って美香を膝にのせて話しているところは子煩悩な父親にしか見えなかった。

そして、その中で食事を作り、布団を敷き、洗濯物をたたむなど、どう見ても家族に見えると思った。犯人はもうすぐ捕まる。そうすれば、美香は家族のもとへ帰る。学校もいけるだろう。石川はグアムへ行くだろう。私はどうなるのだろうと未知は不安になった。

「私には待ってる人もないわ。帰る場所も。また、一人ぼっちの生活が待ってるなんて」

美香はスーパールのカート置き場に行き、さつさとかごを乗せて未知のもとへ来る。ニコツと笑ってその様子を見ながら、未知はこのまま一生過ごしたいと心の底から祈っていた。

段松は石川と待ち合わせの喫茶店に向かった。奥のボックス席に新聞を持ってる男は、確かに石川卓也だった。

「久しぶりだねえ。お元気そうで」

声をかけると、石川はニコツと笑って立ち上がった。

「段松さん、お世話になります」

「いやあ、こんなことに巻き込まれるなんて災難だったね」

「はあ、僕はそういう人生なんでしょうね」

「ところで、子供と女性は大丈夫？」

「ええ、まだ誰にも接触されてません」

「そうか、取りあえずその印鑑は？」

「ここに持ってきました。あの子が狙われるといけないので」

「わかった。それを調べてみよう。関東昇竜会のどの部分に使われているのか、躍起になって探している様子からは重要な印鑑というのは想像できるね」

「お願いします。でも、どうか内密にお願いします。あの子の父親が生かされてるのも、その印鑑の行方を何かしら知っているということが生かされてるのですから」

「うん、怪我をしているので早く見つけないと危ない。車は貸しビルの倉庫から見つかってるが、そこから何に乗り換えたのかがわからない。だが、あの出血量では厳しい」

「その残された車はどこに」

「西新宿だ」

「えっ、近い。私たちは幡ヶ谷にいます。帰ります」

「じゃ、また電話するから」

「はい、失礼します」

あわてて喫茶店から出た石川は胸騒ぎがしていた。確かあの二人は買い物に出かけていた。どのスーパーだ。

未知は買い物をするすると、ちよつと散歩して帰ろうかと美香に声をかけた。学校に行けてない美香は寂しそうだった。近くの公園や坂道をリハビリに歩いてもいいと思った。美香は喜んでスーパーの袋を両手に提げてスキップしていた。

「危ないよ。転んじゃうよ」

「大丈夫だよー。私、走るの一番なんだから」

「その公園で遊ぼう」

「わーい、やったー」

美香の後を追いかけてながら、路地を行くと小さな公園がある。ブランコとシーソーくらいしかないが

普段は子供が使ってるから、美香は外に出ることができなかったのだ。みんなが学校に行ってる間に使っしかなかった。でも、昼間に堂々と遊べないので、本当に久しぶりなのだ。美香は大きな声で歌を歌い走り回った。

公園に隣接するアパートの窓から、一人の男が見ているのを美香は気がつかなかった。

それは信田宗佑だった。

子供の声が美香の声だと気付いた信田は窓にへばりついた。蒲田は信田の両手両足を縛ってさるぐつわをすると、コンビニに行ったところだった。1昼夜何も食べていなかった。だが、声が聞こえてきたとき信田は美香だとすぐに分かった。両目から涙があふれ、叫びたかった。ここに父がいると。だが、後ろ手に縛られた姿では、それもできなかった。部屋には何もないと見回すと、手鏡があるのに気がついた。この鏡に光を当てて美香に教えたかった。美香だけでなくそばにいる女にも。誰でもいい。

「俺を見つけてくれー」

声にならない声で叫びながら、手鏡に光を当てようとした。

まぶしい光が窓から向けられてると思った美香は、その部屋を見上げた。

窓に立つ男はさるぐつわをされていても父だとすぐに分かった。

「パパー！」

その声に驚いたのは未知だった。美香のところに走り寄り、美香の指さす方向を見た。だが、その光は蒲田も見えていた。そして、子供の放った『パパ』の声も聞いたのだった。

「くそー、あの野郎」

蒲田のとった行動は信田を絶望の淵へ追いやった。美香のもとだったのだ。

「何するの。この子は絶対に渡さない！」

「うるさい！ その子を寄こせ！」

蒲田に触らせまいとする未知を、蒲田は手にした拳銃で一発。スローモーションのように倒れる未知。泣き叫ぶ美香。地獄絵図のような光景が信田を圧倒した。昼間の人気のない公園。蒲田は美香を横抱きにして部屋に戻ると、信田を殴りつけた。娘は無事だが、気を失っている。

幡ヶ谷の公園で撃たれた女性が見つかったと通りがかりの電気店のテレビにニュース速報が入った。

石川は足が震えた。未知ということは直感で分かった。美香は？

第10章

第10章

蒲田が逃げているのは、組長の佐賀が怖いからであって、信田から印鑑を取り戻すまでは帰れないのだと思い込んでいるのだ。

段松と野口は、佐賀を任意で呼んだ。

「一体、何ですか」

「見つかったよ。印鑑は娘の宝箱に入っていたのさ。だから、娘が持ち歩いていたのさ」

「その娘というのは、信田のところの？」

「そうだ」

「ちっ、小娘もいいところだ。あんなガキに振り回されて」

「そっちも、蒲田にもうそろそろ自首させないとあんたにもぐつと重い罪が来るんだぜ」

「おいおい、私を脅す気か。私は組のものに盗まれたというだけで、殺しを命じたこともないし、娘を誘拐なんぞしていない。まして信田と会っていない」

「それはそうかもしれないが、あんたがやらせたことはお見通しだぜ。印鑑が盗まれても届けもできないんだろう？」

「フン、いろいろ関係のないことを言うと、人権侵害で訴えるぜ」

「いい加減にしろ！」

聞いていた段松は、書類を見せた。

「この登記に使われてる印鑑が、あんたのものという印鑑の中にあるんだが、誰の土地を転がしてるんだい？」

「こ、これは」

「去年、港に浮いていた社長の事件があったよなあ。犯人は捕まっていなかった人がいなくなった日にこの土地の持ち主が変わってるんだよ。おかしいねえ」

「私は秘書に任せきりだ」

「何が秘書だ。組員ばかりだろう」

「うちは企業なの。どこに暴力団とかやくざって書いてる？」

「まあ、いい。任意はお仕舞いで逮捕という形になるだけだから。ゆっくり調べられるよ」

「ともかく、蒲田が逃げてるとしたら、その近くのアパートの電話はここだ」

「最初から教えて下さいよ」

野口はすぐに渡された電話番号を手にとり、取調室から出て行った。

石川は美香の行方を追っていた。

美香や未知の買物袋が散らかった公園はすぐに見つかった。すでに警察が来て周辺を捜査している。野口の連絡から、公園の東にある2階建てのアパートに警察が取り囲んだ。石川はその窓を見て、美香の残された片方の靴を持っていた。

「絶対に助けてやるから」

部屋の窓は厚いカーテンが引かれ、見えなくなっていた。中からは物音がしないという。隣の住人は退去し、警察が入り込んでいる。子供の声もしないということだった。

石川は気が気じゃなかった。蒲田はもう何をするか見当もつかない。自暴自棄にもなっているだろう。信田も撃たれた足の傷がどうなっているか。生きているのか死んでいるのか。

警察との交渉には横山という刑事が当たった。

横山は入口に機動隊と一緒に立った。

「私は横山庄司というものだ。もうこれ以上人を傷つけると君は自分の人生も家族の人生も失うことになるんだよ」

「……」

「子供と信田さんは元気か？」

「……」

「子供だけでも解放してくれ」

「…断る」

「だが、子供はやがて邪魔になる。早く出した方がいいよ。印鑑なら見つかったんだ」

「何で、どこにあるんだ」

「未知さんたちがいた部屋だ」

「くそ、持ってたのか」

「組長ももういいと言ってるよ」

「ということはお払い箱ということなんだな」

「いや、そうじゃない」

「組長自身が捕まっただよ」

「何でそうなるんだ」

「あの印鑑を使っておかしな土地が組長のところに行ってる」

「ふーん」

「早く出て来いよ」

「いや、断る。もうどうなってもいいんだから」

この男は却って凶暴になっただけなら収まらないと横山は思っていた。というのも蒲田は馬鹿な男ではなさそうだ。

その様子を下から見ると石川は長くなる気がしてきた。だが、この長さは信田宗佑の傷にはいいことはない。もちろん美香にとっても声がないのは気絶しているのか、それとも…。

最悪のことは考えなくなかった。未知は今意識不明の重体だった。この女も自分の周りから消えてしまうのかと思うと、恋していたつもりはないが耐えがたい気持ちがあった。

その頃救急病院の集中治療室で未知は闘っていた。

幸い心臓から少し離れた場所だったのだ。だが、出血は多く、意識は戻っていない。その混濁の意識の中で、未知は夢を見ていた。

小さな赤ん坊を連れていくその姿は、結婚した男山口だった。

「待って、その子を連れてどこへ行くの。私を置いていかないで」
答えはないが山口は何か話している。

「まだ、早い」

そう言っているように見える。

「待つて。置いていかないで。その子を返して」

名前を呼ぼうとしても、その子供の名前がないことに気付いた時、未知は泣いていた。あの事故の後、死産だった。彼は子供も連れて行ってしまった。何も残してくれなかった。未知がとめどない涙を流していると声がした。

「山口さん、分かりますか」

そういうと、看護師が医師を呼びに治療室を飛び出した。

「助かったのね、まだ連れていつてはくれないってことね」

未知はそうつぶやくと、また深い眠りに落ちていくようだった。

『美香ちゃんは無事?』

最終章

最終章

警察は取り囲んだまま3時間経った。蒲田は話にも応じる様子はない。この膠着状態が続くのかと思われた時、美香の泣き声が出てきた。

「パパ、パパ」

「だ…いじょう…ぶだ」

「うるさい！ お互い地獄に落ちればいいんだ！」

「助けて！ パパをお医者さんに見せて」

「それ以上しゃべると、撃つぞ！ 一人も二人もおんなじだ。こうなったら…」

信田の意識が遠のいていく。美香を呼ばなければこんな危険な目にあわさなくて済んだのに、娘を見たらつい、ここにいるんだと叫びたかった。だが、結果的にこんなに怖い目にあわせている。信田は自分が死んだとしても美香だけは無事に助け出したかった。警察の呼び掛けに応じなくなった蒲田は何を考えているのか、きつと逃げ場がないということと自棄になるのではないか。たまらない思いがした。

美香は信田の体にぴったりとひっついて離れなかった。だが、美香の鼓動がドキドキとしているのが伝わってくる。可愛い娘に何をしてあげられるのか、信田はさっきから鏡の破片を見つめていた。

美香に見せた光、蒲田が激昂して割ったが、足元で光っている。

信田は美香に目でそれを取れと合図した。見つからないように。美香の小さな手で取ると、後ろ手に縛られている手に渡した。静かにやらないと、見つかってしまう。手に鏡の破片が当たると、さらに手を怪我しそうだ。娘を助けるのだ。その一念で紐を切り始めた。

「おい、お前はこれからその娘と一緒に暮らせると思っているかも

しれないが、俺はどうなると思ってるんだ。印鑑なんかほしくはねえよ」

「だったら、警察に自首した方が罪は重くない。私が死んだらお仕舞いだ。殺人に問われるよ」

「やかましい。女だって死んでるんだ。きつと」

「…それでも…罪を重ねると、さらに出れなくなる。逃げ続けることはできない」

「俺だって、こんなに落ちぶれるとは思っていなかったよ」

部屋の中で話し声が聞こえ始めたのを、隣に張り込んで刑事たちが壁に耳をそばだてて聞いている。信田も美香も生きていることがわかった。

石川は蒲田の妻と一緒にいた。警察が捜してきたのだ。蒲田を説得できるのはもう家族しかないということだった。だが、この公園まで連れてこられた妻は、説得するのは無理だという。石川は何とか妻の心を解きほぐしたいと話しかけた。

「奥さん、蒲田との間にお子さんはいますか」

「いないわ。あいつは子供が嫌いよ。そうやって作ることは反対なの」

「あなたは？」

「私？ そりゃ、若い時はいらないうちで、このくらいになると焦ってくるわ。私だって母親になりたい」

「信田さんの娘さんもまだ7歳なんです。やっとできたお子さんなんです。信田さんの奥さんは娘さんを守って殺されました。あの子はいもう信田さんしかいないんです」

「でも、私の言うことなんか聞かないわ。きつと」

「それでも話しかけてもらいたいです。これ以上罪を犯さないように。できることは何でも」

「あなたはなんでそんなに子供のことを心配するの？」

「私が親を失って一人だったから。今回育ててもらった親も亡くな

って帰って来たんです。もう誰もいません。妻も死にました。そんな私のような目に遭わせたくないんです」

「…わかったわ。私も一人だしやってみるわ」
「ようやく妻はスピーカーを手にした。」

「あんた、私よ。由美よ」

その声に反応した蒲田は窓際に立った。

「何やってるんだ。帰れ！」

「早く帰してあげて、その人たちを」

「うるさい！」

「私、待つてるから。あんたがどこへ行こうとも待つてるから。もう放してあげて」

「…帰れよ。もう遅いんだよ」

「遅くなんかない！ 生きてるんでしょ」

「もういい。言うな」

「あんた」

返事はなかった。だが、警察も石川も蒲田がこれで変わるんではという期待もした。

部屋に立ちつくす蒲田を見上げながら、信田は最後の紐を切った。気付いてない。足の紐もそつと解くと、美香には目で入口へ行くんだと合図した。やがて、信田は後ろから蒲田に飛びかかった。

もみ合う様子を見た警察は突入し、美香を助け、蒲田に覆いかぶさった。

「奥さん、あなたのお陰です。ありがとうございます」

石川は蒲田の妻に頭を下げた。

「これで、長い刑務所生活ね。でもいいわ。待つって約束したし」
「本当にありがとう」

石川は信田と抱き合う美香を見て、病院に急いだ。

未知は眠っていた。医師から峠は越えたと言われほっとした石川は、未知の枕元に座った。

石川も連日の疲労で椅子で眠り始めた。安らいだ気分だった。未知はやがて目を開けると、石川がそばにしていると分かって、じつと彼を見つめていた。

『この人はいいい人だわ。私のことをどうしていいか困っているのね』

「ああ、起きてたのか」

「ええ、美香ちゃんは無事だったのね」

「ああ、お父さんも無事だ」

「よかったわ。あれで助けられなかったら私も死んでいたわ」

「ああ、君は命をかけて助けてくれたんだね」

「まあね」

「一緒にグアムへ行くんだから、早く治せよ」

「いいのよ、無理しないで」

「無理じゃないさ。仕事のパートナーさ」

「仕事？ 何の？」

「土産物の買いつけさ、それに日本の観光客のガイド。給料は安いぞ、その代わり衣食住は完備する」

「ふうん、なかなかいいわね。住まいはどこ？」

「給料少ないから、僕の家」

「お金がないからなのね」

「そう。他に意味はない」

「ふうん、どうしようかなあ」

「どうしようかなんて迷うなよ。本気なんだから」

「いいの？ 本当に一緒に行っても？」

返事の代わりに石川は立ちあがると未知の額にキスをした。

「これが返事だ」

未知は静かに目をつぶり、うなずいた。後は涙がこぼれて仕方がなかった。

石川は未知にささやいた。

「早く治して、パス

グアムと一緒に降り立つ日は近い。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2890j/>

哀しき死角

2010年10月8日14時32分発行